

カキ園の雑草管理法の違いによるニホンジカの行動特性			
[要約] <u>カキ園の雑草管理法</u> として <u>清耕管理</u> することにより、 <u>草生管理</u> に比較し <u>ニホンジカのカキ園出沒回数</u> 、 <u>滞在時間</u> および <u>カキ新梢摂食時間</u> を削減することができる。			
農業技術振興センター・栽培研究部・花き果樹分場		[実施期間] 平成 18 年度	
[部会] 農産	[分野] 多面的機能	[予算区分] 県単	[成果分類] 指導

[背景・ねらい]

ニホンジカは、植物の葉や新芽などを主食としていることから、雑草がニホンジカを誘引し、農作物被害を助長していることが知られている。一方、果樹園ではある程度草を生やす草生管理が多く実施されており、ニホンジカによる新梢等の摂食被害が増加することが懸念される。

そこで、カキ園の雑草管理法において、中耕や除草剤使用により草を生やさない清耕管理と草生管理の違いが、ニホンジカの行動に与える影響について調査する。

[成果の内容・特徴]

ニホンジカのカキ園への出沒回数および滞在時間は、清耕管理を実施することにより草生管理に比べ大幅に減少する（図 1、2、4）。ニホンジカによるカキの新梢摂食時間も減少する（図 3）。

草生管理をしたカキ園におけるニホンジカの行動は、草を摂食する行動が大半を占め、カキの新梢のみを摂食する行動は見られない（図 4）。

[成果の活用面・留意点]

ニホンジカは、主に草を摂食するための餌場としてカキ園に出沒しており、新梢を摂食するために出沒しているのではないと考えられる。よって、ニホンジカによる果樹新梢等の摂食害を減らすためには、草生管理よりも清耕管理が望ましく、大面積で実施するほどその効果は大きいと推察する。

清耕管理は、樹園地が傾斜地の場合は表土が流亡する等欠点があるため、ニホンジカの出沒や摂食害の被害が多い季節に清耕管理を行い、それ以外の季節は草生管理を行うなど、ほ場や栽培条件に応じた雑草管理をする必要がある。

[具体的データ]

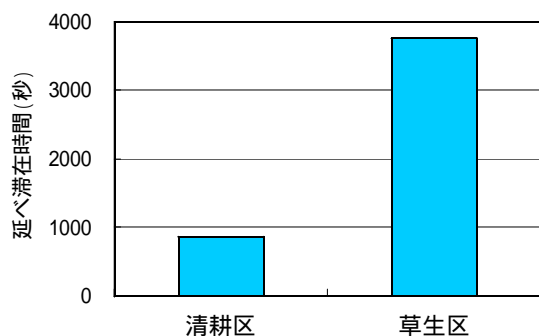


図1 カキ園における雑草管理法の違いとニホンジカの滞在時間

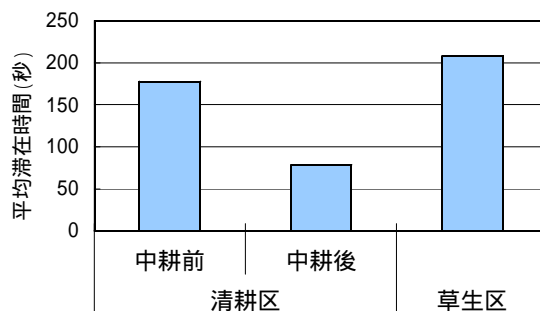


図2 カキ園における雑草管理法の違いとニホンジカの平均滞在時間

注1: 滞在時間は摂食行動、歩行の合計時間であり、ニホンジカがカメラに映った時間を測定した。複数個体がいる場合は、最初の1頭が映し出され、全ての個体が見えなくなった時間を測定した。

注2: グラフは4月19日～6月13日(20:00～翌朝5:00)の期間における延べ滞在時間である。

注1: 最初の1頭がカメラに映し出され、全ての個体が見えなくなるまでの時間を測定し、出没1回当たりの摂食と歩行の合計時間を示した。

注2: 清耕区の中耕は4月14日から実施した。

注3: 調査期間は、清耕区の中耕前が4月3日～4月12日、中耕後が4月19日～6月13日、草生区が4月19日～6月13日。

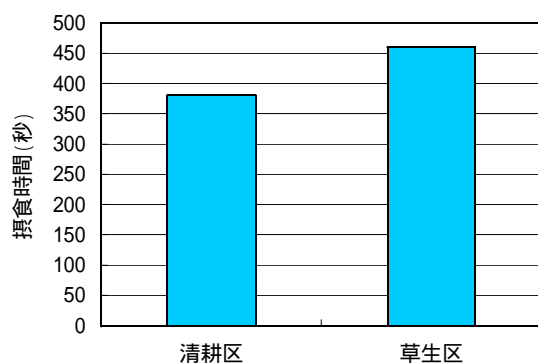


図3 カキ園における雑草管理法の違いとニホンジカのカキ新梢摂食時間

注1: カメラに映ったニホンジカがカキの新梢を摂食しはじめてから、摂食を終え、その場を立ち去る直前までの時間を測定した。撮影期間中、複数個体が同時にカキの新梢を摂食することはなかった。

注2: グラフは4月19日～6月13日(20:00～翌朝5:00)の期間における延べ時間である。

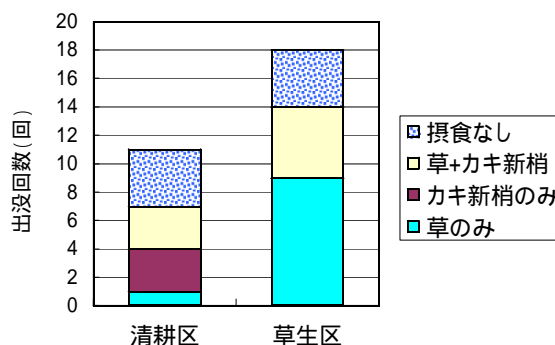


図4 カキ園における雑草管理法とニホンジカの摂食行動パターン

注1: 複数個体がいる場合は、最初の1頭が映し出され、全ての個体が見えなくなるまでを1回と測定し、そのうち1頭でも草やカキ新梢の摂食行動をとった場合は、その回は摂食したもとしてカウントした。

注2: 調査期間;4月19日～6月13日

[その他]

・ 研究課題名

大課題名：農林水産業の持つ多面的機能の評価および増進に関する研究開発

中課題名：心やすらぐ田園空間の創造と多面的機能の発揮に関する研究開発

小課題名：シカによる農作物被害回避確立試験

・ 研究担当者名：小嶋俊英、高畑正人

